



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの生活実態
Author(s)	大澤, 真平; Osawa, Shimpei
Citation	子ども発達臨床研究, 19, 149-159
Issue Date	2024-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rcccd.19.149
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91908
Type	departmental bulletin paper
File Information	031-1882-1707-19.pdf



子どもの生活実態

大澤 真 平*

Children's daily life

— From the viewpoint of deprivation index —

Shimpei OSAWA

はじめに

本章では子どもの生活の実態について、家族資源を背景としたその不平等なあり方を確認していきたい。前回の札幌市・北海道調査と異なり、今回の調査では「はく奪指標」を作成することが可能な質問を加えたこともあり、家族の持つ資源と子どもの生活のはく奪の状態について簡単に検討を行いたい。もちろん子どもの生活の実態に大きな影響を持つのは、世帯の所得や貯蓄といった経済的資源が基本になるが、貧困とは資源の調達と組み合わせによる生活実現の困難な状態と考えれば、経済的資源以外にも時間、情報、社会関係、健康状態など家族の持つ資源が重要になる（大澤2023）。本章ではこのような視点から、まずは前半で子どもの生活実態、特に遊びや余暇活動などについて所得階層差を確認する。その後、後半でははく奪指標を用いて、子どもの生活実態の違いをもたらす家族資源の検討を行う。なお本章では所得階層を「低所得層Ⅰ」「低所得層Ⅱ」、中間所得層ⅠとⅡおよび上位所得層をまとめた「中間＋上位所得層」の三階層で分析を行っている。これは経済的困窮に置かれた層とそれに隣接する層、そして一般的な生活水準で生活する層のあいだの

格差・不平等の状態を端的に示すことをねらいとしているためである。

1. 所得階層別にみる子どもの生活の実態

(1) 「経済的にできないこと」

調査設計では子どもの生活について、保護者に各項目をすることができているかについて尋ねている。各項目については強制的な欠如かどうかを判断するために、「したくない」「経済的にできない」「それ以外の理由でできない」の選択肢を用意した。これにより、経済的資源の欠如・不足による子どもの生活の制約の実態を捉えることができる。図表1は「所得階層別にみる『経済的にできない』こと」の割合を調査学年ごとに示したものである。

まず、すべての項目について、数倍から十数倍にものぼる所得階層差が示されていることがわかる。子どもの生活の実態には、世帯所得の違いによる格差が歴然として存在する。各項目の詳細を確認すると、「クリスマスプレゼントや正月のお年玉をあげる」や「毎年新しい洋服・靴を買う」といった項目では「中間＋上位所得層」では欠如している子どもはほぼいない。しかし、これら

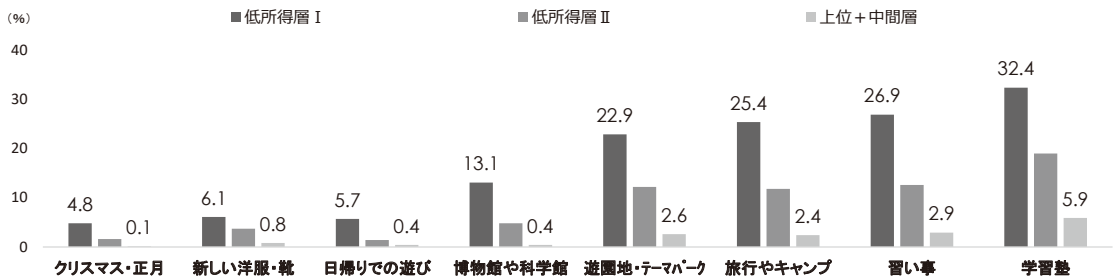
*札幌学院大学人文学部

すべての子どもに与えられて当然と考えられる必需品とも言える項目でも、「低所得層Ⅰ」では欠如している子どもが数%から十数%みられる。また学年が上がるほど欠如している子どもの割合も増

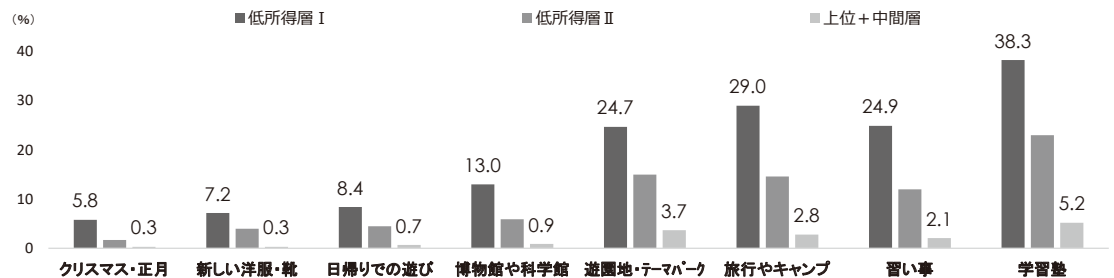
していくのが確認できる。

次に余暇に関する4つの項目、「日帰りで遊びに行く」「博物館・資料館・科学館・美術館などに行く」「遊園地やテーマパークに行く」「1年に

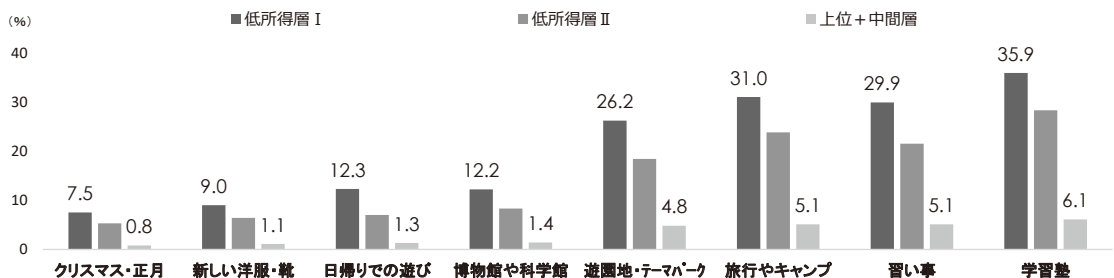
図表1 所得別にみる「経済的にできない」こと(小2)



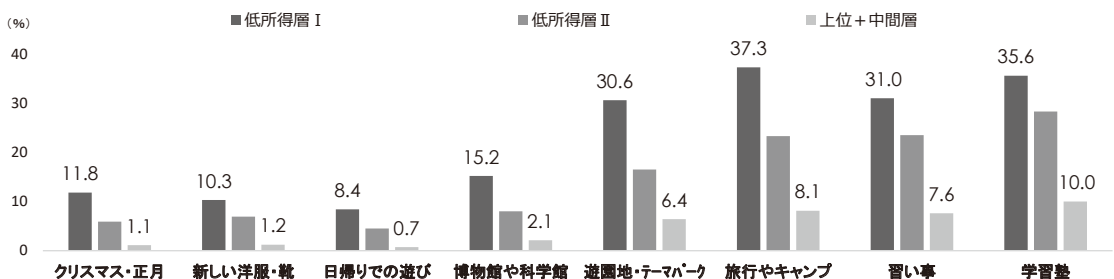
図表1 所得別にみる「経済的にできない」こと(小5)



図表1 所得別にみる「経済的にできない」こと(中2)



図表1 所得別にみる「経済的にできない」こと(高2)



1 回くらい旅行やキャンプに行く」を確認してみる。これらの項目は日帰りでの遊びから旅行やキャンプまで、より費用が掛かる可能性のある項目になるほど、欠如している子どもの割合が増えているのがわかる。実際には余暇活動を実現するためには、経済的資源のみならず、保護者の休み（時間資源）、移動手段（自家用車などの物的資源）、など多くの資源を動員しなければならない。資源の多く必要な項目ほど欠如の割合が高くなっている。また、余暇活動に関する項目も、おおむね学年が上がるほど欠如している子どもの割合が増しているのが確認できる。

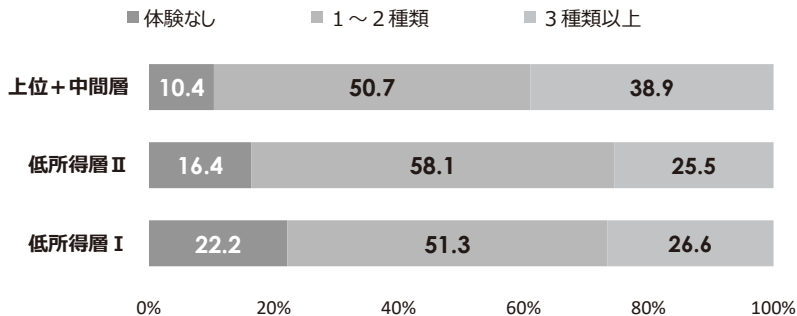
最後に「習い事に通わせる」「学習塾に通わせる」といった学校外学習に関する項目を確認したい。いずれの項目も、そしていずれの学年でも、経済的な理由で欠如している割合が高く示されている。いまや子どもの多様な学習経験や機会は市場化が進んでいるのが現状だが、そのことはまた所得格差が進むことを意味しており、結果にはそれが明確に示されていると言えよう。

実際の生活はやりくりのなかで必要が満たせたり、満たせなかったりするのが現実だが、概して低所得層になるほど、多くの項目が欠如していることが示された。また量的調査でとらえているのは調査時点での状態であり、生活状態は動態のなかで変化することを考えると、より多くの子どもが生活上の出来事を欠く経験をしている可能性が考えられるだろう。

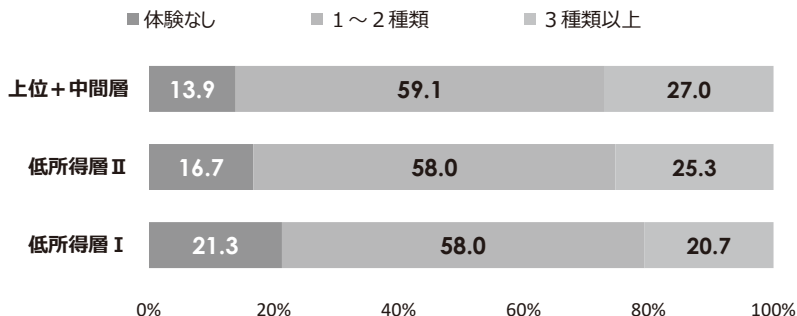
(2) 夏休みの余暇活動

今回の調査では、子どもの生活を捉えるために新たに夏休みの余暇活動についての項目を加えた。現在、子どもの権利保障の実現を念頭に、ヨーロッパ諸国を中心に、子どもの余暇時間や放課後を社会的な制度として整備する「放課後の社会化」政策がすすめられている。背景には女性の就労の一般化に伴う子育ての社会化の必要や、非認知能力の向上といった人的資本形成のねらいが含まれているが（池本 2016）、いずれにしろ家庭まかせであった子どもの余暇時間について、社会的に制

図表 2 夏休みの余暇活動（小 5）



図表 2 夏休みの余暇活動（中 2）



度化を進める政策が進展している。ここでは子どもの権利条約31条の「児童が文化的小および芸術的な活動並びにレクリエーションおよび余暇活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する」という部分の、「活動」に焦点を当てた設問について確認していきたい。

「あなたは今年の夏休みに、以下のようなことがありましたか」とする設問を小学5年生、中学2年生の子ども用調査票に記載した。項目は「楽器演奏や合唱、演劇、絵画、写真、書道など芸術文化活動を行うこと」、「学校のクラブ活動や学校外でのスポーツ教室などで、運動やスポーツ活動を行うこと」、「登山、ハイキング、キャンプなど自然のなかで活動すること」、「科学教室、プログラミング教室、工作教室、自然観察会など体験学習を行うこと」、「競技場でのスポーツ観戦、テーマパーク、遊園地などレジャー施設で遊ぶこと」、「祖父母宅への帰省旅行、国内旅行、海外旅行など宿泊をとまなう旅行をすること」の6項目で構成されている。結果は図表2に示した。

図表2をみると夏休みの余暇活動を経験した数は小5、中2とも所得階層差が確認できるが、小5の回答のほうがやや階層差が大きい。いずれの学年でも「低所得層Ⅰ」では2割以上の子どもが夏休みの余暇活動を経験していないと答えていることは大きな課題であろう。この設問は、「どこで」

「どのように」余暇活動を経験したのかについては問うていないため、市場化された余暇活動といった影響だけではなく、学校での部活動や地域の科学館や博物館などの公共の資源の影響も把握することができておらず、さらなる検討が必要と考えられる。

(3) 部活動への参加—公的な社会資源との関係—

次に子どもの生活の実態として、部活動への参加を確認したい。子どもの生活は家族だけではなく、社会的に実現する部分も大きい。特に中学生、高校生段階になると学校で放課後を過ごす時間の割合が高くなる。前回調査では中学生段階になるとおよそ8割の子どもが放課後に過ごす場所として「学校」を選択していた。日本においては部活動が放課後のプログラムとして大きな役割を果たしている。

図表3は中学2年生、高校2年生の部活動への参加の割合を示したものである。両学年ともに部活動への参加には所得階層差が認められ、所得が低い層ほど部活動への参加していない子供が多くなっている。特に「低所得層Ⅰ」では両学年とも3割以上の子どもが部活動に参加していない状態にある。

部活動に参加「しない」のか、それとも参加「できない」のか、その理由を確認したのが図表4で

図表3 所得階層別の部活動参加割合(中2) (%)

	参加	不参加	N(人)	p
中間+上位層	75.4	24.6	1664	
低所得層Ⅱ	72.4	27.6	428	***
低所得層Ⅰ	65.1	34.9	392	

χ^2 二乗検定 n.s.: 非有意 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

図表3 所得階層別の部活動参加割合(高2) (%)

	参加	不参加	N(人)	p
中間+上位層	75.6	24.4	1307	
低所得層Ⅱ	70.9	29.1	327	**
低所得層Ⅰ	68.1	31.9	357	

χ^2 二乗検定 n.s.: 非有意 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

ある。中学2年生、高校2年生の両学年ともっとも多い理由は「入りたい部がないから」となっており、この項目には所得階層差はみられない。しかし、他の理由として中学2年生では「お金がかかるから」、高校2年生では「お金がかかるから」と「家の事情（家族の世話、家事など）」があるからに所得階層差がみられる。特に「お金がかかるから」については両学年とも2割以上の回答となっており、経済的な負担を心配して部活動に参加「できない」子どもが少なからずいることが示された。貧困世帯に育った若者へのインタビュー調査では、経済的な心配だけではなく、家族のケアや家事、あるいは収入を得るためにアルバイトをする必要があり部活動に参加できないことが語られている（大澤 2023）。同様の結果が量的調査でも示されたと言えるだろう。

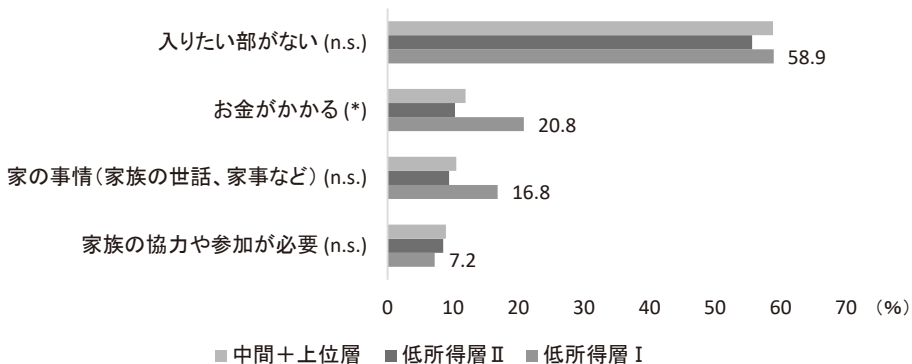
2. はく奪指標からみる子どもの生活の実態

(1) はく奪指標

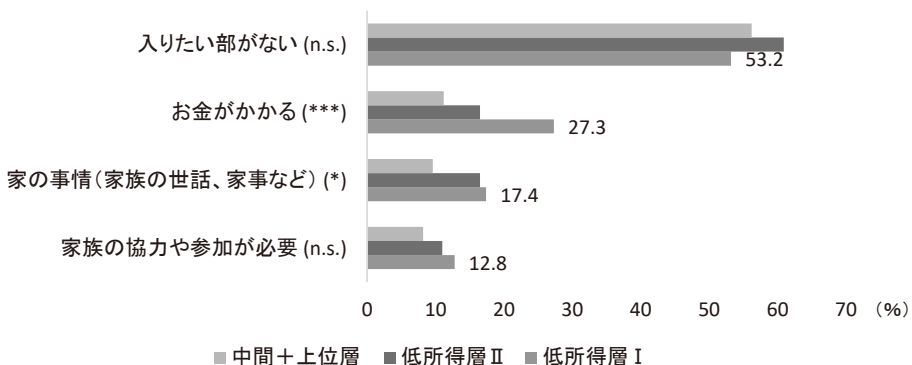
2節でははく奪指標を用いて、子どもの生活実態と家族資源の関係についての簡単な検討を行う。貧困のなかでの生活はすべてが欠如しているのではなく、資源の調達と組み合わせのなかで何を実現し、何をあきらめるのか、といったやりくりのなかで行われる。その場合に、子どもの生活の個別の項目を検討することではなく、生活を集計的に扱うはく奪指標が子どもの生活水準を把握するのに役立つ。はく奪指標は所得の代替指標として扱うことが一般的だが、本節ではそれだけではなく、生活を実現する資源との関連を把握するためにはく奪指標を用いている。

前回の北海道・札幌市調査でははく奪指標を作

図表4 部活に参加しない理由（中2）



図表4 部活に参加しない理由（高2）



成するための、選好ではなく経済的困窮による強制的な欠如を捉える設問は設定されていなかった。今回の調査ではこの点について新たに設問を用意した。図表 5 に小学 5 年生のはく奪指標の作成に関する項目を示した（他学年については図表省略）。はく奪指標を構成する設問の回答から、選好として欠如している「必要と思わない」「したくない」「それ（経済的にできない）以外の理由でできない」を除いて、「持っている」「している」との回答（普及率）が 90%を超える項目を、

はく奪指標を構成する変数とした。これらの変数は「低所得層Ⅰ」と「それを上回る階層」を区分した所得階層のクロス表検定で有意差があり、貧困の指標としての妥当性を確認している。

このように作成したはく奪指標（最小値 0、最大値 10）を二値変数にするために、各学年でケースの 9 割以上が含まれる 2 項目をカットオフ値として、1 項目以下の欠如を「非はく奪」、2 項目以上の欠如がある場合を「はく奪」とした（図表 6）。

図表 5 (％)

	小学 5 年生				
	持っている・ している	経済的に 持てない・できない		p	
		上位 4 階層	下位 1 階層 (低所得層Ⅰ)		
①子どもの本	99.4	0.2	2.9	<.001	***
②子ども部屋	91.7	6.3	18.7	<.001	***
③子ども専用の勉強机	98.2	1.8	9.9	<.001	***
④スポーツ用品(グローブやサッカーボール等)	98.5	0.6	6.5	<.001	***
⑤多くの子どもが持っているおもちゃ	98.6	0.6	5.7	<.001	***
⑥自転車	98.9	0.3	5.1	<.001	***
⑦毎年新しい洋服・靴を買う	97.6	1.1	7.3	<.001	***
⑧クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる	98.1	0.6	5.8	<.001	***
⑨子どもの学校行事などに親が参加する	96.8	0.1	1.8	<.001	***
⑩日帰りで遊びに行く	90.2	1.6	8.4	<.001	***

χ 二乗検定 n.s.：非有意 *：p<0.05 **：p<0.01 ***：p<0.001
Cronbach (α) 係数 0.742

図表 6 はく奪数の分布 (％)

スコア	小 2	小 5	中 2	高 2
0	87.7	89.6	91.6	91.2
1	6.2	6.3	5.1	4.7
2	3.8	2.3	1.7	1.7
3	1.0	0.9	0.9	0.5
4	0.7	0.2	0.2	0.5
5	0.3	0.5	0.3	0.6
6	0.2	0.1	0.1	0.2
7	0.1	0.1	0.1	0.2
8	0.0	0.0	0.0	0.2
9	0.1	0.0	0.0	0.0
10	0.0	0.1	0.0	0.1

2 項目以上の欠如をはく奪とする

(2) 属性別に見た相対的はく奪率

まずは属性別のはく奪率を確認したい。結果は図表7のとおりである。小2、小5、中2、高2のすべての学年において、所得が低い階層ほどはく奪率が高くなる傾向が示されている。いずれの学年も「中間+上位所得層」でははく奪率は1%~2%となっているが、それに対して「低所得層Ⅰ」ではおよそ10倍~10数倍程度のはく奪率となっていることがわかる。

性別によるはく奪率の差はみられなかった。ただし小2のみ「低所得層Ⅰ」に男女差が確認されている。

世帯構成をみると、小2、小5、高2においては「両親世帯」より「ひとり親世帯」の方が有意にはく奪率は高くなっていた。しかし、「低所得層Ⅰ」の世帯構成とはく奪率の差は小5、中2、高2の学年では無く、経済的困窮に置かれた世帯においては「両親世帯」であっても「ひとり親世帯」であっても子どもの生活水準の低さには差がみられなかった。言い換えると経済的困窮世帯にあっては、大人が二人いてもそれは子どもの生活水準を維持することにはつながらないということになる。世帯内に大人が二人いることで時間や人手などが充足され、それが子どもの生活水準に変換される可能性が高まるのは、一定水準の世帯所得を上回ったときと考えられる。ただし小2においては「低所得層Ⅰ」で「両親世帯」と「ひとり親世帯」にはく奪率に有意差が示されている。子どもが小さいうちはケアに手と時間がかかることで、ひとり親世帯がより不利な条件に置かれているのかもしれない。

では同居親族は子どもの生活水準を維持する資源となりうるのだろうか。核家族か祖父母同居親族かではく奪率の違いを確認してみると、すべての学年において有意差は示されなかった。また「低所得世帯Ⅰ」のひとり親世帯、両親世帯を、それぞれ核家族世帯か祖父母同居世帯かではく奪率を確認してみたが、すべての学年でいずれも有意差は示されなかった（ただしサンプル数の問題があるかもしれない）。

(3) 資源と子どもの生活

最後に家族の持つ資源とはく奪率の関係について確認しておきたい。図表8は金銭、時間、社会関係、情報、健康状態など、家族の持つ資源の状況と子どものはく奪率を示したものである。まずもっとも子どもの生活に関するはく奪率に影響を与えているのは「普段の家計が赤字か黒字か」と「現在の貯金額があるかないか」の経済的な資源の状況であった。小2、小5、中2、高2の全学年とも経済的な資源の状況が子どもの生活のはく奪率にもっとも大きな影響を与えていた。所得階層別に確認すると、「中間+上位所得層」に比較して、「低所得層Ⅱ」「低所得層Ⅰ」のはく奪率は相当に高くなっている。特に「低所得層Ⅰ」では、「家計が黒字」や「現在の貯金額あり」であっても、かなり高いはく奪率が示されている。経済的困窮にある世帯ではやりくりのなかで必需品なども制約しながら「黒字」の状態になっていたり、貯金額のデータでも10万円未満といったなかで生活が行われており、単純に「黒字」や「貯金額あり」が生活状態の安定を示しているのではないことが理解できる。学年別にみると高2の「低所得層Ⅰ」で「家計が赤字」「現在の貯金額なし」のはく奪率がかなり高くなっている。

次に時間資源の状況を確認してみる。子どものことでの悩みとして「子どもとの時間が持てない」かどうかと、はく奪率の関係にはすべての学年で有意差が示されている。経済的な問題のみならず、子どもに関わる時間資源の有無が子どもの生活に関するはく奪率に影響を与えている。「時間の貧困」が注目される中、それが子どもの生活水準を左右することの詳細について、あらためて検証が必要であろう。

また社会関係も子どもの生活に関するはく奪率に影響を与えている。「立ち話の付き合い」のある人の有無と、「緊急時に子どもの面倒を見てくれる人」の有無のいずれもはく奪率との関連がみられる。特に「低所得層Ⅰ」では「立ち話程度の付き合い」と「緊急時に子どもの面倒を見てくれる人」がいらない場合、いずれもはく奪率が30%

図表7 属性別相対的はく奪率(小2)

	n(人)	はく奪数	(%)	χ^2	
全体	1564	96	(6.1)		
所得階層					
中間+上位層	1049	26	(2.5)		
低所得層Ⅱ	278	26	(9.4)		
低所得層Ⅰ	237	44	(18.6)	92.9	***
性別					
男子	778	56	(7.2)		
女子	783	40	(5.1)	2.95	n.s.
世帯構成					
両親世帯	1405	65	(4.6)		
ひとり親世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	147	30	(20.4)	57.68	***
両親世帯	136	18	(13.2)		
ひとり親世帯	95	25	(26.3)	6.32	*
核家族	1450	90	(6.2)		
祖父母同居世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	102	5	(4.9)	0.28	n.s.
ひとり親 核家族	81	23	(28.4)		
祖父母同居	14	2	(14.3)	1.23	n.s.
ふたり親 核家族	123	18	(14.6)		
祖父母同居	13	0	0.0	2.19	n.s.

χ^2 二乗検定 n.s.: 非有意 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

図表7 属性別相対的はく奪率(中2)

	n(人)	はく奪数	(%)	χ^2	
全体	1489	49	(3.3)		
所得階層					
中間+上位層	1079	12	(1.1)		
低所得層Ⅱ	240	21	(8.8)		
低所得層Ⅰ	170	16	(9.4)	58.58	***
性別					
男子	623	18	(2.9)		
女子	681	24	(3.5)	0.42	n.s.
世帯構成					
両親世帯	1300	38	(2.9)		
ひとり親世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	177	9	(5.1)	2.36	n.s.
両親世帯	84	9	(10.7)		
ひとり親世帯	82	5	(6.1)	1.15	n.s.
核家族	1365	42	(3.1)		
祖父母同居世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	112	5	(4.5)	0.65	n.s.
ひとり親 核家族	66	4	(6.1)		
祖父母同居	16	1	(6.3)	0.001	n.s.
ふたり親 核家族	76	9	(11.8)		
祖父母同居	8	0	0.0	1.06	n.s.

χ^2 二乗検定 n.s.: 非有意 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

図表7 属性別相対的はく奪率(小5)

	n(人)	はく奪数	(%)	χ^2	
全体	1939	79	(4.1)		
所得階層					
中間+上位層	1348	15	(1.1)		
低所得層Ⅱ	329	22	(6.7)		
低所得層Ⅰ	262	42	(16.0)	131.83	***
性別					
男子	811	31	(3.8)		
女子	997	43	(4.3)	0.27	n.s.
世帯構成					
両親世帯	1687	51	(3.0)		
ひとり親世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	235	25	(10.6)	31.5	***
両親世帯	124	18	(14.5)		
ひとり親世帯	131	21	(16.0)	0.11	n.s.
核家族	1779	71	(4.0)		
祖父母同居世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	143	5	(3.5)	0.09	n.s.
ひとり親 核家族	110	20	(18.2)		
祖父母同居	21	1	(4.8)	2.36	n.s.
ふたり親 核家族	105	15	(14.3)		
祖父母同居	19	3	(15.8)	0.03	n.s.

χ^2 二乗検定 n.s.: 非有意 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

図表7 属性別相対的はく奪率(高2)

	n(人)	はく奪数	(%)	χ^2	
全体	978	40	(4.1)		
所得階層					
中間+上位層	711	7	(1.0)		
低所得層Ⅱ	128	7	(5.5)		
低所得層Ⅰ	139	26	(18.7)	93.79	***
性別					
男子	496	20	(4.0)		
女子	510	19	(3.7)	0.064	n.s.
世帯構成					
両親世帯	844	22	(2.6)		
ひとり親世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	126	17	(13.5)	33.66	***
両親世帯	77	11	(14.3)		
ひとり親世帯	60	14	(23.3)	1.85	n.s.
核家族	867	33	(3.8)		
祖父母同居世帯 (うち低所得階層Ⅰ)	103	6	(5.8)	0.97	n.s.
ひとり親 核家族	41	10	(24.4)		
祖父母同居	19	4	(21.1)	0.08	n.s.
ふたり親 核家族	62	11	(17.7)		
祖父母同居	15	0	0.0	3.11	n.s.

χ^2 二乗検定 n.s.: 非有意 * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

図表 8 資源別相対的はく奪率 (小2)

項目	全 体			中間 + 上位所得層			低所得層 II			低所得層 I		
	n (人)	はく奪数 (%)	χ	有意差	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)
「普段の家計黒字」	1298	50 (3.9)			934	14 (1.5)	212	15 (7.1)	152	21 (13.8)		
「普段の家計赤字」	246	44 (17.9)	71.2 ***		100	12 (12.0)	69	9 (14.3)	83	23 (27.7)		
「現在の貯金額」あり	1120	44 (3.9)			815	16 (2.0)	193	13 (6.7)	112	15 (13.4)		
「現在の貯金額」なし	220	42 (19.1)	70.4 ***		76	6 (7.9)	52	11 (21.2)	92	25 (27.2)		
「子どもとの時間が持てない」悩みなし	1452	80 (5.5)			980	22 (2.2)	260	22 (8.5)	212	36 (17.0)		
「子どもとの時間が持てない」悩みあり	112	16 (14.3)	13.9 ***		69	4 (5.8)	18	4 (22.2)	25	8 (32.0)		
「立ち話の付き合い」あり	1503	84 (5.6)			1018	24 (2.4)	264	23 (8.7)	221	37 (16.7)		
「立ち話の付き合い」なし	61	12 (19.7)	20.2 ***		31	2 (6.5)	14	3 (21.4)	16	7 (43.8)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いる	1116	61 (5.5)			743	15 (2.0)	201	14 (7.0)	172	32 (18.6)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いない	132	19 (14.4)	15.7 ***		88	7 (8.0)	23	6 (26.1)	21	6 (28.6)		
「子ども施策の情報をネット検索」ある	1203	69 (2.5)		n.s.	811	19 (2.3)	219	20 (9.1)	173	30 (17.3)		
「子ども施策の情報をネット検索」ない	303	21 (6.9)	0.6		202	6 (3.0)	50	5 (10.0)	51	10 (19.6)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ある	1213	59 (4.9)			826	16 (1.9)	213	15 (7.0)	174	28 (16.1)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ない	301	33 (11.0)	15.7 ***		193	10 (5.2)	59	10 (16.9)	49	13 (26.5)		
「きょうだいの人数」3人以下	1487	87 (5.9)		*	1011	26 (2.6)	259	20 (7.7)	217	41 (18.9)		
「きょうだいの人数」4人以上	72	9 (12.5)	5.3		35	0 (0.0)	19	6 (31.6)	18	3 (16.7)		
「保護者は健康である」あてはまる	1319	59 (4.5)			910	17 (1.9)	229	18 (7.9)	180	24 (13.3)		
「保護者は健康である」あてはまらない	245	37 (15.1)	40.5 ***		139	9 (6.5)	49	8 (16.3)	57	20 (35.1)		

χ 二乗検定 n.s.: 非有意 * : p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

図表 8 資源別相対的はく奪率 (小5)

項目	全 体			中間 + 上位所得層			低所得層 II			低所得層 I		
	n (人)	はく奪数 (%)	χ	有意差	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)
「普段の家計黒字」	1641	44 (2.7)			1231	13 (1.1)	250	14 (5.6)	160	17 (10.6)		
「普段の家計赤字」	274	33 (12.0)	53.3 ***		104	2 (1.9)	73	8 (11.0)	97	23 (23.7)		
「現在の貯金額」あり	1393	40 (2.9)			1043	11 (1.1)	209	13 (6.2)	141	16 (11.3)		
「現在の貯金額」なし	226	33 (14.6)	62.1 ***		79	4 (5.1)	55	8 (14.5)	91	21 (22.8)		
「子どもとの時間が持てない」悩みなし	1803	66 (3.7)			1255	12 (1.0)	311	19 (6.1)	237	35 (14.8)		
「子どもとの時間が持てない」悩みあり	136	13 (9.6)	11.3 **		329	22 (6.7)	262	42 (16.0)	25	7 (28.0)		
「立ち話の付き合い」あり	1848	70 (3.8)		**	1303	15 (1.2)	307	22 (7.2)	238	33 (13.9)		
「立ち話の付き合い」なし	91	9 (9.9)	8.3		45	0 (0.0)	22	0 (0.0)	24	9 (37.5)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いる	1420	55 (3.9)			987	11 (1.1)	251	17 (6.8)	182	27 (14.8)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いない	152	17 (11.2)	16.8 ***		101	2 (2.0)	25	4 (16.0)	26	11 (42.3)		
「子ども施策の情報をネット検索」ある	1461	54 (3.7)			1028	13 (1.3)	251	16 (6.4)	182	25 (13.7)		
「子ども施策の情報をネット検索」ない	426	23 (5.4)	2.4 n.s.		289	2 (0.7)	69	6 (8.7)	68	15 (22.1)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ある	1493	51 (3.4)			1049	14 (1.3)	260	17 (6.5)	184	20 (10.9)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ない	405	26 (6.4)	7.4 **		275	1 (0.4)	62	5 (8.1)	68	20 (29.4)		
「きょうだいの人数」3人以下	1830	65 (3.6)			1291	14 (1.1)	305	18 (5.9)	234	33 (14.1)		
「きょうだいの人数」4人以上	105	14 (13.3)	24.3 ***		53	1 (1.9)	24	4 (16.7)	28	9 (32.1)		
「保護者は健康である」あてはまる	1582	57 (3.6)			1108	12 (1.1)	282	19 (6.7)	192	26 (13.5)		
「保護者は健康である」あてはまらない	357	22 (6.2)	4.9 *		240	3 (1.3)	47	3 (6.4)	70	16 (22.9)		

χ 二乗検定 n.s.: 非有意 * : p<0.05 ** : p<0.01 *** : p<0.001

図表 8 資源別相対的はく奪率 (中 2)

項目	全 体			中間 + 上位所得層			低所得層 II			低所得層 I		
	n (人)	はく奪数 (%)	χ	有意差	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)
「普段の家計黒字」	1270	23 (1.8)			980	8 (0.8)	176	7 (4.0)	114	8 (7.0)		
「普段の家計赤字」	203	26 (12.8)	65.8 ***		85	4 (4.7)	62	14 (22.6)	56	8 (14.3)		
「現在の貯金額」あり	1086	28 (2.6)			848	10 (1.2)	152	12 (7.9)	86	6 (7.0)		
「現在の貯金額」なし	184	18 (9.8)	23.4 ***		60	1 (1.7)	60	8 (13.3)	64	9 (14.1)		
「子どもとの時間が持てない」悩みなし	1409	42 (3.0)			1034	10 (1.0)	218	19 (8.7)	157	13 (8.3)		
「子どもとの時間が持てない」悩みあり	80	7 (8.8)	7.9 **		45	2 (4.4)	22	2 (9.1)	13	3 (23.1)		
「立ち話の付き合い」あり	1437	42 (2.9)			1044	11 (1.1)	233	18 (7.7)	160	13 (3.1)		
「立ち話の付き合い」なし	52	7 (13.5)	17.5 ***		35	1 (2.9)	7	3 (42.9)	10	3 (30.0)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いる	1087	33 (3.0)			787	10 (1.3)	176	13 (7.4)	124	10 (8.1)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いない	126	13 (10.3)	16.4 ***		83	2 (2.4)	25	5 (20.0)	18	6 (33.3)		
「子ども施策の情報をネット検索」ある	1155	34 (2.9)		n.s.	846	10 (1.2)	182	15 (8.2)	127	9 (7.1)		
「子ども施策の情報をネット検索」ない	282	13 (4.6)	2.0		197	2 (1.0)	48	6 (12.5)	37	5 (13.5)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ある	1188	31 (2.6)			871	9 (1.0)	189	14 (7.4)	128	8 (6.3)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ない	260	16 (6.2)	8.5 **		182	3 (1.6)	41	7 (17.1)	37	6 (16.2)		
「きょうだいの人数」3人以下	1424	44 (3.1)			1048	11 (1.0)	218	19 (8.7)	158	14 (8.9)		
「きょうだいの人数」4人以上	64	4 (6.3)	2.0 n.s.		31	1 (3.2)	22	2 (9.1)	11	1 (9.1)		
「保護者は健康である」あてはまる	1237	29 (2.3)			910	7 (0.8)	192	10 (5.2)	135	12 (8.9)		
「保護者は健康である」あてはまらない	252	20 (7.9)	20.6 ***		169	5 (3.0)	48	11 (22.9)	35	4 (11.4)		

χ 二乗検定 n.s.: 非有意 *: p<0.05 **: p<0.01 ***: p<0.001

図表 8 資源別相対的はく奪率 (高 2)

項目	全 体			中間 + 上位所得層			低所得層 II			低所得層 I		
	n (人)	はく奪数 (%)	χ	有意差	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)	n (人)	はく奪数 (%)
「普段の家計黒字」	818	17 (2.1)			632	6 (0.9)	100	3 (3.0)	86	8 (9.3)		
「普段の家計赤字」	142	22 (15.5)	55.9 ***		70	1 (1.4)	27	4 (14.8)	45	17 (37.8)		
「現在の貯金額」あり	681	15 (2.2)			531	4 (0.8)	76	3 (3.9)	74	8 (10.8)		
「現在の貯金額」なし	140	24 (17.1)	57.8 ***		60	3 (5.0)	36	4 (11.1)	44	17 (38.6)		
「子どもとの時間が持てない」悩みなし	933	35 (3.8)		*	685	6 (0.9)	120	6 (5.0)	128	23 (18.0)		
「子どもとの時間が持てない」悩みあり	45	5 (11.1)	5.9		26	1 (3.8)	8	1 (12.5)	11	3 (27.3)		
「立ち話の付き合い」あり	942	36 (3.8)		*	685	7 (1.0)	124	6 (4.8)	133	23 (17.3)		
「立ち話の付き合い」なし	36	4 (11.1)	4.7		26	0 (0.0)	4	1 (25.0)	6	3 (50.0)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いる	699	19 (2.7)			515	4 (0.8)	95	3 (3.2)	89	12 (13.5)		
「緊急時に子供の面倒を見てくれる人」いない	105	16 (15.2)	34.4 ***		66	2 (3.0)	14	3 (21.4)	25	11 (44.0)		
「子ども施策の情報をネット検索」ある	696	22 (3.2)			520	4 (0.8)	80	4 (5.0)	96	14 (14.6)		
「子ども施策の情報をネット検索」ない	241	15 (6.2)	4.4 *		166	2 (1.2)	40	3 (7.5)	35	10 (28.6)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ある	743	27 (3.6)			547	5 (0.9)	94	4 (4.3)	102	18 (17.6)		
「子ども施策の情報を家族や友人から」ない	201	11 (5.5)	1.4 n.s.		143	1 (0.7)	29	3 (10.3)	29	7 (24.1)		
「きょうだいの人数」3人以下	939	36 (3.8)			694	6 (0.9)	115	7 (6.1)	130	23 (17.7)		
「きょうだいの人数」4人以上	39	4 (10.3)	3.9 *		17	1 (5.9)	13	0 (0.0)	9	3 (33.3)		
「保護者は健康である」あてはまる	775	22 (2.8)			574	3 (0.5)	100	3 (3.0)	101	16 (15.8)		
「保護者は健康である」あてはまらない	203	18 (8.9)	14.9 ***		137	4 (2.9)	28	4 (14.3)	38	10 (26.3)		

χ 二乗検定 n.s.: 非有意 *: p<0.05 **: p<0.01 ***: p<0.001

～40%となっており、孤立傾向にある世帯ほど子どもの生活も充足されないことが理解できる。また「子ども施策の情報をネット検索」で収集するかどうかは、はく奪率との関連がみられなかった。しかし「子ども施策の情報を家族や友人から」収集することが無いと回答した場合にははく奪率が高くなっており、情報資源そのものよりも、情報をもたらす人とのつながりが子どもの生活水準を維持する資源として機能している様子もうかがえた。

そのほか、保護者の健康状態もはく奪率に関係している。「保護者は健康」かどうかと、子どもの生活に関するはく奪率を確認すると、いずれの学年でも、そして所得階層が低いほど、はく奪率が高くなっている。特に子どものケアに手がかかる小2でその影響が大きいようである。

おわりに

本章では子どもの生活の実態について簡単に調査結果を確認してきた。日本を含む経済的に発展した福祉国家における貧困とは、生活のすべてが実現できないということではなく、それぞれの家庭の持てる資源と必要に応じて、ある事柄は行えるが、ある事柄は行えないというように、やりくりのなかで生活の実態が異なる。しかし、ここに

みられるように子どもの日常生活、余暇活動には明らかな所得階層差があり、経済的困窮にあるほど子どもの生活の必要が欠如している実態がある。所得が不十分なために、世帯の生活や世帯構成員のすべての必要を満たせない中で、子どもの基本的な必要が取捨選択を迫られている可能性がある。また経済的資源だけではなく、実際に生活を組み立てるには、時間、社会関係、健康状態、手段、サービスなどさまざまな資源が必要となる。本章の検討では経済的資源が子どもの生活のはく奪につながるだけではなく、そのほかの資源の不足もまた子どもの生活のはく奪に関係していることが示唆された。貧困にある子どもへの対応を政策的に考える場合、まずは家庭の経済的資源の充足に加え、実際に生活を組み立てるために必要なそのほかの資源の充足をどのように考慮するのかといった観点も求められるだろう。

【参考文献】

- 大澤真平（2023）『子どもの「貧困の経験」—構造の中で
のエージェンシーとライフチャンスの不平等』法律文化
社
池本美香（2016）「放課後児童クラブの整備の在り方—子
どもの成長に相応しい環境の実現に向けて」『JRI レ
ビュー』 5 (35), 21-49.

